

Q トマトを雨よけなしで栽培する際の 注意点を教えてください。

ズバリ覆いがない分、雨が多くても少なくとも天水管理がポイントになります。一昔前のトマト栽培では、「水をやらない」といったことも耳にしたことがあるかと思いますが、ですが、実際にはトマト果実の多くは水分で満たされており、非常に多くの水を要求する作物の一つと考えられます。特に最近の気象条件では高温・乾燥が続くこともあり、トマト栽培にとって、灌水設備は必要不可欠となつてきております。

露地栽培であつたとしても、灌水チューブを設置し、日照が続くときには灌水をしてあげること、樹の寿命が延び、収量も増やすことが期待できます。灌水と合わせて注意したいのが、着果処理です。露地栽培では訪花昆虫や風などの影響で比較の実がつきやすいですが、雨が続くと花粉による受粉能力が低下します。そのようなときはホルモン処理（「トマトーン」100倍希釈液）を利用した着果促進に努め、適正な草勢・着果数を保てるように工夫しましょう。

最後に病気についてです。雨に当たると多く発生するのが細菌性病害です。細菌性病害は定期的な農薬散布で防ぐことが可能です。

適切な病害診断のもと、ホームセンターや種苗店などにある登録された農薬を効果的に使用することで、長い期間トマト栽培を続けることが可能となります。



↑左はキュウリの「かんざし苗」、いわゆる老化苗です。購入する場合は葉色が濃くつやのある元気な苗(右)を選んでください。

ちょっと
気になる?!

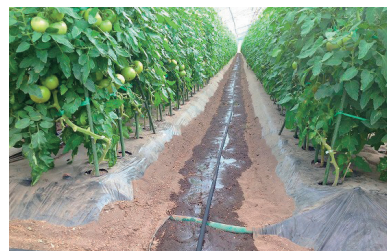
野菜の豆知識

果菜編①

このページでは、野菜栽培をするうえで、よくある疑問にタキイのブリーダーが答えします。



タキイ研究農場
いいづか 飯塚 もと なり 元成



↑チューブによる通路灌水の例。露地栽培でも灌水チューブを設置しておくとういでしょう。



↑ホルモン処理は「トマトーン」希釈液を成長点にかからないように手で覆いながら散布します。

Q キュウリをアーチ状に仕立てた場合、アーチ 天井部は採光を図るため、茂らせない方がよい ですか？また摘芯の目安を教えてください。

キュウリではアーチ型の支柱にネットを張って仕立てることが多いのですが、アーチ上部を早く茂らせてしまうと内部に届く光が減少して、湿度が高くなり風通しも悪くなります。したがって色の淡い果実、曲がり果、病気の発生が増加します。また光の当たらない葉は黄化が急速に進むので摘葉作業も増えます。

5月下旬〜6月上旬定植の場合、枝の伸長が落ちてくるお盆ごろまでは、アーチ上部はふさがずに採光の維持に努めましょう。主枝、仕立て枝の摘芯位置



↑枝の伸長が落ちてくるお盆ごろまでは、アーチ上部はふさがずに採光の維持に努めます。写真は「Vシャイン」の圃場。

は、アーチの肩付近で手の届く範囲が基本です。摘芯した上部の節から展開する側枝は強く、伸長が早いので、摘芯位置を高くしすぎてしまうと、天井はふさがりやすくなってしまうので、迷ったら少し上部に余裕を持たせた位置で摘芯することをおすすめします。

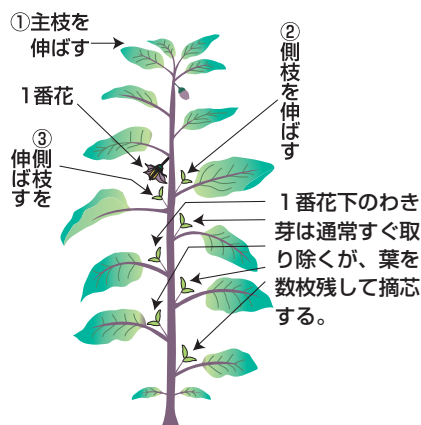
Q キュウリの 「かんざし苗」って なんですか。



タキイ長野研究農場
ばん ば 馬場 だい ごと 大悟

かんざし苗とは、成長点付近で主に雌花が咲いており、頭が花で飾られた状態の苗のことを指します。いわゆる老化苗です。肥料不足、低温、育苗中に極度にしおれたなどの過酷な条件に遭遇したストレスによつて引き起こされます。多くの場合、根が褐変しており、定植しても活着が悪く、通常の苗と比べて回復することに時間と手間を要してしまいます。

苗半作という言葉があるように購入苗の場合には、①成長点が葉で覆われて、②葉が垂れずに立っており、③色が濃く、葉につやがある、元気な苗を選ぶようにしましょう。



単為結果性品種は着果負担が大きくなりやすいので、初期の樹作りが非常に重要です。元肥を2割増やす、追肥の間隔を短くする、発根剤を施用するといった肥培管理のほか、葉面積を確保することも大切です。定植してしばらくすると1番花より下のわき芽が伸び始めますが、このわき芽はすぐに取り除かず、葉を数枚残して蕾が残らないよう摘芯してください。主茎の葉が十分茂るまでの間、わき芽の葉が樹作りに貢献してくれます。上部の葉が大きくなり光が当たりにくくなったら、残しておいたわき芽を取り除きましょう。あまり長く残しておくと風通しが悪くなり、病害虫発生の原因となりますから注意してください。

Q
ナスの単為結果性品種の肥培管理、剪定などに関して教えてください。



タキイ研究農場 大津木 大輔

Q
単為結果性品種の灌水について教えてください。

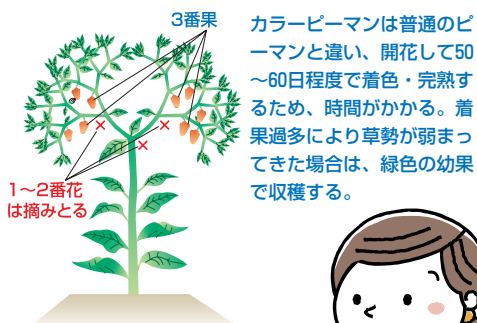


↑定植後は株元灌水で活着を促進します。しおれないように気をつけてください。

定植後、従来品種は水やりを控えることで樹勢を抑えてなりぐせをつける水管理が主流でしたが、単為結果性品種は強勢でも着果を落とす心配がほとんどありません。逆に単為結果性品種は従来品種と比べて、こまめな水やりが必要です。晴れた日は株当たり300〜500ml程度の水を毎日与え、しおれないよう注意してください。また、果実の肥大が始まると吸水量が高まります。収穫が始まるころには株当たり1〜2ℓ、その後は生長に応じて3〜4ℓほどを目安に灌水してください。

Q
カラーピーマンを直売所に出荷したいのですが、着色まで時間がかかる露地栽培では樹勢管理が難しいですか？

カラーピーマンは2本仕立て



カラーピーマンは普通のピーマンと違い、開花して50〜60日程度で着色・完熟するため、時間がかかる。着果過多により草勢が弱ってきた場合は、緑色の幼果で収穫する。



↑露地栽培ではしっかりと誘引する。支柱を立ててひもを張り、枝を固定する。



タキイ研究農場 田中 可奈子

カラーピーマン出荷用の営利栽培では、高品質の果実を得るために、ハウスで栽培するのが一般的ですが、栽培管理をほんのちよつと工夫しさえすれば露地栽培でも十分に品質のよいものが収穫できます。

露地栽培で特におすすめの品種は、果実が赤色の「フルーピーレッドEX」と黄色の「フルーピーイエロー」です。カラーピーマンは完熟果を収穫するため、開花から着色まで2カ月近くかかり、未熟果を収穫するピーマンと比較して株への着果負担が大きい作物です。この2品種は、通常のカラーピーマンに比べてひとまわり小さい150g程度で、熟期も早く、樹勢管理がしやすくなります。



↑樹勢管理しやすい「フルーピーレッドEX」と「フルーピーイエロー」

で摘芯し主枝を主体に着果させます。

風雨にさらされる露地栽培では、しっかりと誘引を行う必要があります。畝の横に数本支柱を立てて、ひもを（地面と水平に）張り、枝を固定するといでしょう。すべての果実を着果させると株への負担が大きくなるので、傷のついた障害果などは速やかに摘果して草勢のバランスを保ちましょう。最初に着果させた果実が膨らんだら、追肥をスタートします。追肥をしても、主枝の成長点から開花した花までの距離が短いままの場合には、摘果あるいは着色前の果実を収穫するなどして、着果負担を軽減させてください。摘果した果実は、中型ピーマンより青臭みが少なく肉厚で食べ応えがありますので、緑色の幼果での販売もおすすめです。